

非漢字系中級学習者の論文読解における辞書使用のありかたの変化 —教育実践論文の読解プロセスの事例報告—

桑原 陽子

要 旨

本研究では、同一の日本語学習者1名を対象に2016年1月と2018年4月に実施した論文読解過程の調査のデータから、辞書の使用のあり方が2年間でどのように変わったかについて記述する。2016年1月の調査では、辞書の例文の参照はほとんど行われていなかった。しかし、その後の日本語力の向上と使用する外部リソースの変化によって、2018年4月の調査では、辞書を使用する際に、例文の詳細な参照を通して語の意味を理解することに重点が置かれるようになった。このように同じ学習者の日本語の読解過程を2年以上にわたって調査したデータはほとんどない。本研究では、その時々読解過程における辞書使用の実態を詳細に記述することが、辞書使用の指導を考えるための貴重なデータとなると考える。

キーワード：学術論文、読解、辞書、非漢字系中級学習者、教育系

1. 目的

本研究は、非漢字系学習者が論文を読む過程で、辞書をどのように使用しているかについて、具体的な事例を挙げながら論じる。筆者は、学術論文の読み方を学び始めたばかりの非漢字系中級日本語学習者1名を対象に、論文を読む過程を2年以上継続して調査し記録している。その調査方法は、実際にふだんどおりの方法で論文を読みながら考えていることを声に出して母語で話してもらうというもので、桑原(2018)では、そのデータの一部である2016年1月の調査の記録を対象に、論文を読む過程で語の意味理解に関する読み誤りが具体的にどのように現れるかについて分析した。その結果、非漢字系中級学習者が学術論文を読む難しさは、次のようなものであった。

- (1) 語の区切り方がわからない。特にひらがなの連続をどう区切るかが難しい。
- (2) 「である体」の文末表現を適切に読むのが難しい。
- (3) 字形の似ている漢字を識別するのが難しい。
- (4) (1)(3)が原因で、辞書で単語の意味を調べるのが難しい。
- (5) 辞書から適切な語義や、該当する例文を選択するのが難しい。また、漢字熟語が多い専門用語の意味の理解が難しい。

このうち、(2)以外がすべて辞書に関わる難しさである。たとえば、(1)については「緩やか」を「緩／やか」と区切った事例があり、そのため「ゆる」を辞書で調べようとして「緩やか」の意味にたどり着くのにかなりの時間がかかってしまった。また、(3)については、「知」を「和」と混同

した結果、「知」の意味が辞書で調べられなかった事例があった。

本研究では、桑原（2018）で分析対象とした2016年1月の記録と、その約2年後の2018年4月の記録をもとに、辞書の使用のあり方がどのように変わったかを比較する。

今回新たに分析対象とする2018年の記録と前回の2016年の記録とを比べると、学習者の日本語能力が大きく伸び、語彙の量、漢字の知識ともに格段に増えている。また、論文を読むときに使用する外部リソースが大きく異なり、桑原（2018）で困難点として挙げた（1）（3）を含む（4）は、それらの外部リソースを使用することによってかなり解消されている。そのことによって、学習者の読解における辞書の使用の役割はどのように変わったのだろうか。学習者の読みの過程を具体的に記述することによって、辞書使用のあり方の変化を可視化する。

2. 調査方法

2.1 調査協力者

桑原（2018）と同じ、非漢字系中級日本語学習者1名である。第1言語は英語である。本論文でもこの調査協力者を「学習者A」と呼ぶことにする。学習者Aは、2016年1月の時点では修士課程1年生で、日本語学習期間は約1年3か月であった。『みんなの日本語中級I』を使用する日本語クラスに所属しており、当時の日本語レベルは中級前期だったと言えるだろう。2018年4月の時点では、博士課程後期2年生である。日本語の教科書を使った日本語の学習をしておらず、日本語の授業も受講していなかったが、日本での滞在年数や日常の日本語使用等を総合的に見て、日本語のレベルは日本語能力試験N2合格が目安とされる中上級レベルと考えられる。

2.2 調査時期

本研究の分析対象は次の2回の調査の記録の一部である。

2016年1月23日（調査時間合計180分）

2018年4月29日（調査時間合計90分）

以後、それぞれを「2016年調査」「2018年調査」と呼ぶことにする。

2.3 調査材料

調査材料はそれぞれ以下のとおりである。どちらの論文も学習者A自身が、自分の研究のために読む必要があるものとして選んでいる。

2016年調査：牧田秀昭（2009）「北陸本線に列車を走らせよう」福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『授業のプロセスとデザイン 数学・理科・技術編』第1章第2節の一部（2241文字）

2018年調査：松木健一（2004）「ロングスパンの学習活動を支える物語としての記録」福井大学教育地域科学部附属中学校研究会著『中学校を創る 探究するコミュニティへ』第2章第2節「ロングスパンの学習活動を支える記録と物語」の一部（705文字）

2.4 調査方法

両調査ともに、桑原（2018）で示したように、ふだん通りの方法で論文を読んでもらった。たとえば、「必ず音読してください」「すべての文を翻訳してください」などのような読み方に関する指示は一切しておらず、いつも自分が論文を読むときと同じように読んでもらっている。そのために、ふだん学習者Aが論文を読むときに使っているノートパソコンとスマートフォンを使ってもらった。そして論文を読みながら、考えていることを英語で話してもらった。調査には英語と日本語の通訳者1名が参加し、学習者Aが英語で話したことはすべてほぼ同時に日本語に通訳された。調査者は、学習者Aの発言を聞きながら、必要に応じて通訳者を介して質問した。たとえば、学習者が「こういう文は好きじゃない」と話した際には、「どういう点が好きじゃないのですか」のように、できるだけ具体的に話してもらえるように質問している。このような調査の様子は、学習者Aの許可を得た上で、ビデオ2台で録画し、さらにICレコーダーで録音した。

3. 読解プロセスの分析

3.1 読解中に使用された外部リソース

2016年調査で学習者Aが使用したのは、スマートフォン用の日英辞書アプリ「imiwa?」と、「グーグル翻訳 (google translation)」である。「imiwa?」は主に読み方がわからない漢字を手書き入力によって調べるとき使用した。グーグル翻訳は、読み方がわかる漢字で構成された熟語の意味を調べる場合、漢字熟語の読み方を確認する場合、意味がわからない表現や文をまるごと翻訳する場合に使用した（桑原, 2018）。

2018年調査で使用したのは、スマートフォン用の日英辞書アプリ「Yomiwa?」とノートパソコンにインストールされている「ウィズダム英和・和英辞典」である。「Yomiwa?」は、スマートフォンのカメラで読む対象の日本語文を写真撮影すると、文字データとして取り込むことができ、それを自動的に品詞分解してくれるアプリである。さらに付属の辞書機能によって、品詞分解された個々の語の読み方と意味が英語で表示される。「Yomiwa?」を使用することによって、学習者Aが漢字熟語の意味を調べる時間は、劇的に減少した。2016年調査では、読み方がわからない漢字熟語をいちいち手書きで入力しながら意味を調べなければならないことが多く、1つの漢字熟語の意味と読み方を知るのに2分以上かかることもあったからである。

学習者Aは、2018年調査で新しい段落を読み始めるときには、まず「Yomiwa?」を使って、読み方と意味がわからない単語がない状態にしている。読み始めた後に語の意味をもう一度確認したいときは、ノートパソコンのウィズダム和英辞典を使用している。ウィズダム和英辞典は、キーボードによるローマ字入力で単語の検索を行う。

3.2. 2016年調査の辞書使用例

本節以降、学習者Aが実際にどのように論文を読んでいるかを、学習者Aが論文読解中に話したことをもとに記述する。本論文中に引用する発話は、学習者Aが英語で話したことを筆者が日本語に翻訳し、必要に応じて要約したものである。

読解過程を記述した表中では、学習者Aが論文を音読した部分を下線で示す。なお、音読部分を記述するときは、文のどの部分を音読しているかがわかるように、表中の「文」の位置に合わせた。続けて読んだものは一行で書き、途中で音読が途切れた場合は次の行に書いた。このような記述方法は、館岡（2005）を参考にしたものである。英語で話している最中に日本語が混じった場合など論文の音読ではない日本語の使用は「 」で示す。また、学習者Aの行動は〔 〕で示す。

辞書の使用は【 】で示す。【G】は学習者Aがグーグル翻訳を使って意味を調べたところで、【i】は「imiwa?」を使って意味を調べたところである。

表1は2016年調査で（6）の文を学習者Aが初めて読んだときの過程を記述したものである。

（6）今回は「一次」の概念を捉えるために1年生時の正比例の学習で用いた「附中の前を通るバスの動き」を進めて、同じ速さの概念を用いるダイヤグラムを題材に選んだ。（牧田，2009，p.26）

たとえば読解過程の1行目は、まず学習者Aが「今回は一次」と音読したところで音読を止めて、「一次」の意味をグーグル翻訳で調べたことを示している。また、2行目から4行目までは、実際は（7）のように話している。

（7）一次の概念を捉え、catch ために1年生時間の正比例

「一次の概念を捉え」と音読したあと、「捉え」の意味を確認するためか、英語で「catch」と言い、そのあと「ために」からさらに音読を続けている。

表1からわかるのは、まず学習者Aが語の区切りを意識するためか、何度も同じ部分の音読を繰り返していることである。また、意味がわからない単語に出会うたびに、その都度読むのを中断して意味を調べており、それがさらに音読の繰り返しにつながっているようである。

なお、グーグル翻訳は辞書ではないので、入力した日本語の単語に対して翻訳語の候補を1つ提示するだけである。そのため辞書とは異なり、複数の意味の候補の中から文脈に合うものを選択する必要はない。表1を見ると、1回目に読んでいるときは、音読が中心で、意味が分からない語を翻訳語に置き換えるにとどまっているようである。

表1 2016年調査の読解過程の例（1回目）

文	今回は「一次」の概念を捉えるために1年生時の正比例の学習で用いた「附中の前を通るバスの動き」を進めて、
読解過程	<p>今回は一次【G一次】</p> <p>一次の概念を捉え とらえる ために1年生時間^{まで}の正比例 正比例【G正比例】</p> <p>今回は「一次」の概念を捉えるために1年生時間の正比例の学習でヨウいた？【i用いる】</p> <p>用いた附属中の前を通るバスの動き 動きを進めて 【G進めて】</p>
文	同じ速さの概念を用いるダイヤグラムを題材に選んだ。
読解過程	<p>同じ速さの概念を用いるダイヤ ダイヤ ダイヤグラム ダイヤグラムを題 題 題 「問題の題」「材料」【G題材】 題材に選んだ</p>

表2は表1の続きで、(6)の文を2回目に読んだときの記録である。

2回目の読みの過程は、表1で示した1回目よりも、文の内容の理解に関わる発話が多い。「1年生時の正比例の学習で用いた」がその後に続く「附中の前を通るバスの動き」を修飾していることに言及しているように、修飾関係の把握に関わるコメントも見られる。

辞書の使用について見ると、表2で辞書「imiwa?」を使用したのは「用いる」を調べた1回だけである。そこでは、偶然目にした例文中の「用いている」に対して、活用のルールに合っていないのではないかという疑問を発しているのみである。これは、学習者Aが「用いる」の「て形」は「用いて」になるはずだと誤解したことによるもので、「用いる」の意味について詳しく辞書を参照している様子はない。

2016年調査全体の中で、学習者Aが外部リソースを用いた回数は、グーグル翻訳が73回で、「imiwa?」は29回である。「imiwa?」が使用された29回のうち、「imiwa?」に記載されている例文を論文中の語の意味の理解のために参照しようとしたのは2回だけである。しかし、そのどちらも2018年調査と比べると十分な参照ではなく、文の意味の理解への貢献は少ない。たとえば、そのうちの1回は、桑原(2018)でも示したように、「～に驚く」について、「その薬は彼の体に驚くほどよく効いた」という不適切な例文を参照しているため、意味の理解には役に立っていない。つまり、2016年調査では、辞書は、意味のわからない語や表現について英語の翻訳語が何かを知るために使用することがほとんどであったと言える。そして、翻訳語を知った後に、それが文脈に合うかどうかを詳しく検討することもほとんど行われていない。

表2 2016年調査の読解過程の例（2回目）

<p>文</p> <p>読解過程</p>	<p>今回は「一次」の概念を捉えるために1年生時の正比例の学習で用いた「附中の前を通るバスの動き」を進めて、</p> <p>今回は 「今回は」は今回【G今回】 一次関数、一次の概念 を捉えるために1年生の学習で用いた これは2年生で、1年生の時に正比例を習っているから、これは「用いた」、これは説明しているはず 「附中の前を通るバスの動き」 「用いた」はきっとこれを説明しているはず。 彼らは去年正比例を習っている、このテーマで 「附属中の前を通るバスの動き」 を進めて だから全体の概念を通して授業を進めていきたい</p>
<p>文</p> <p>読解過程</p>	<p>同じ速さの概念を用いるダイヤグラムを題材に選んだ。</p> <p>同じ速さの概念を用いるダイヤグラムを 同じ速さの概念 同じ 同じ速さの概念、を用いる 「用いる」というのは将来なのか現在なのか、【i用いる】 これは先生のやりたいことなのか、やっていることなのかかわからない。辞書形は「用いる」、て形は「用いて」、これは特別な形。「用いる」は「用いている」になるはずだけど、「用いて」は辞書にない。 例外ですか？ とにかく辞書形だから未来のことを示しているのだろう。</p>

3.3. 2018年調査の辞書使用例

2018年調査の中で辞書使用の事例として示すのは（9）を読む過程である。

（9）社会科教諭の永田は、部会で1つの課題から多様な協働が生まれる他教科（音楽・美術・理科）の実践報告に接し、主題—探究—表現型の授業デザインを思い描けるようになっていく。かえって異なる教科の方が、授業の特徴を鮮明に映し出すものである。（松木，2004，P.189）

（9）の前半「社会科教諭の永田は、部会で1つの課題から多様な協働が生まれる他教科（音楽・美術・理科）の実践報告に接し、」については表3で、後半「かえって異なる教科の方が、授業の特徴を鮮明に映し出すものである」については表4で、読解の過程をまとめる。

2018年調査ではグーグル翻訳を使用しておらず、「Yomiwa?」で読み方と意味を知った後は、必要な場合のみウィズダム和英辞典を使って単語の意味を確認している。そのため、辞書に記載されている複数の意味から文脈にあったものを選択する場面が2016年調査よりも多く見られる。表3、表4では、辞書を参照している部分を網掛けにし、①から番号をつけて示す。また、ウィズダム和英辞典を参照したところは【D】で示す。

- (10) ① [隣接する] (国境・境を接する) border (on...); (隣り合う) adjoin
 ・道路に接する a house *on* the road.
 ▶彼の土地は私の土地に接している。His land *borders (on) [adjoins, is adjacent to]* mine.
- ② [接触する] come into contact (with); (触れる) touch
 ・異文化に接する *come into contact with* different cultures.
 ▶この市は北側が海と接している This city *touches* the sea on the north.
 ▶彼は毎日英語に接するようにしている He tries to *expose himself to* English every day.
- ③ [応接する] (来客を迎える) have, receive; (会う) see*; (接触する) have contact with; (世話する) take care of ..., (病人・客などを) attend (to) ...; (店の客に対応する) server
 ・彼は毎日たくさんの来客に接する
 He *has [receives, sees]* a lot of visitors every day.
 ▶その村では外国人と接する機会がほとんどなかったので、外国人にどう接したらよいか (どんな態度をとるべきか) とまどう人も多い。
 The villagers have had very few opportunities to *have contact with* foreigners; many people [there are many who] do not know how to *behave toward* them.
 ▶彼女は愛情をもって生徒たちに接する She *takes loving care of* her pupils.
- ④ [知らせなどに] (聞く) hear*; (受け取る) get, receive.
 ・彼の訃報に接する *get [receive]* the news of his death.
 ・彼は朗報に接して喜んだ He was delighted *at [to hear]* the good [happy] news.

まず、表3中の①において、学習者Aは(10)の情報を見ながら「『に』、どれが『に』?」と発言している。「に」は助詞「に」のことで、「に」に注目しているのは、「実践報告に接し」の「接し」の前に助詞「に」があることをふまえて、「接する」の前に「に」がある例文を探そうとしているためである。そして、(10)の②の最後の例文「彼は毎日英語に接するようにしている」を指さして、「これ」と発言している。つまりこの段階で、「接する」の意味として、②の「接触する come into contact with」を選択しているのである。

しかし、「1つの課題から多様な協働が生まれる他教科(音楽・美術・理科)の実践報告に接し」がうまく解釈できない。そのため、②では再度「接する」の意味を確認している。その際には、②の例文「異文化に接する *come into contact with* different cultures.」を参照しながら、「異文化(different culture)、接する(come into contact)」と発言している。これは「異文化に接する」という日本語の語順で、例文の英語訳を読んだものである。

その後、「1つの課題から多様な協働が生まれる」は「他教科の実践報告」を修飾している名詞修飾構造だと理解したものの、やはり文全体をうまく解釈できず、③では、再び辞書に戻っている。ここでは、「接する」の意味として、②以外の可能性も探っており、「接する」の意味を②から④の「聞く」「受け取る」に修正している。

表4 2018年調査の読解過程「かえって」の事例

文	<p>かえって異なる教科の方が、授業の特徴を鮮明に映し出すものである。</p>
読 解 過 程	<p>①【Dかえって】「かえって on the contrary」 かえって異なる教科の方が、授業の特徴を鮮明に映し出すものである。 かえって何？ここに「部会」があつて、社会科の先生は自分の授業デザインを描けるようになる。 かえって異なる教科の方が 「は」がない。 かえって、違った教科を見ると、授業の特徴を鮮明に 「かえって」は英語では「on the contrary」じゃないんじゃないか。なぜなら「の方が」があるから。</p> <p>②【Dかえって】 [2番目に記載されているのはrather thanであることに気づく] でも「rather than」でもないんじゃないか。(例文に)ネガティブなものがないから。 [例文を参照する。 「私の方こそかえっておわびしなければなりません。It is for me rather than for you to apologize」 「転地がかえって彼には悪かった。A change of air did more harm than good」 「彼女には欠点があるのでかえって気に入っている I like her all the better for her faults」] 「より」「より」[例文中に「より」を探しているが見つからない] 「より」みたい？ [1番目のon the contraryの例文を参照する。 「私が彼を助けようと思ってしたことがかえって彼を窮地に立たせるはめになった。My attempt to help him ironically ended by putting him in difficult position」] 社会の先生は新しい先生なんじゃないか。これまで同じ教科で話をしてきたのでは？附属では違う教科でやることが強調されている。 (中略) 授業デザインの特徴に焦点を当てるためには違う教科の教員と協働したほうがいい、という意味。</p>

ここで注目したいのは、例文を参照する際に、動詞がどのような助詞と一緒に使われているのかを強く意識していることである。表3の中で①では助詞「に」に注目して例文を探している。また、②の直前では、(11)のように、「に」の部分を繰り返していることから、それがうかがえる。

(11) 生まれる教科の実践に、実践に、に

また、文の意味が解釈できないと、すぐに辞書に戻って、自分が今選択している語の意味が適切かどうか、他の意味の可能性がないかどうかを探っている。その際も、例文を詳しく参照している様子が見られた。

次の表4の事例も、表3と同様に複数の意味の中から、文意に合うものを探すため辞書に戻っている事例である。表4は(9)の2文目の文頭「かえって」の解釈と、その「かえって」を手掛かりにした文の意味の解釈の過程である。

学習者Aは、最初①では「かえって」の意味を“on the contrary”としていた。そして、「かえって」が“on the contrary”だとすると、「かえって」の前後の内容がうまくつながらないことに気づく。なぜなら、「かえって」が“on the contrary”であれば、「かえって」の前と後では逆のことが述べられて

いると予想されるからである。しかし、論文では「かえって」の前で異なる教科の教員が実践報告をし合うことによって、「自分の授業デザインを描けるようになる」というプラスの点が述べられており、「かえって」の後も引き続き異なる教科の教員間の実践報告によって「授業の特徴が鮮明になる」というプラスの点が述べられている。そこで、学習者Aは「かえって」の意味は“on the contrary”ではないのではないかという疑問を持ち、②で「かえって」の意味を調べて直している。

②では、「かえって異なる教科の方が」のように「かえって」の後に「の方が」という比較の表現が使われていることが、文の意味の解釈の手掛かりになっている。学習者Aは、「かえって」を辞書の2番目に記載されている“rather than”として、“than”にあたる助詞「より」を探しながら、例文を詳細に読んでいる。結局、例文に「より」は使われていないことがわかったが、「かえって」に対しては(12)の発言のように「より」のような意味ではないかと推測している。

(12) 「より」みたい？

その上で、調査材料の論文中には書かれていないが、「ここで取り上げられている社会の教師が新任で、附属学校で特徴的な異なる教科の教師間の実践報告に慣れておらず、これまで同じ教科の教員とだけ実践報告をしてきたのではないか」という推測をしている。この推測はおそらく妥当であり、この論文の筆者が「同じ教科の教員との実践報告よりも違う教科の教師間の実践報告のほうがよい」と主張しているという点について、最終的には文意をほぼ正しくつかんでいる。

4. 考察

2016年調査は、グーグル翻訳の使用頻度と比較すると辞書の使用は少なく、さらに辞書に書かれた例文の参照も十分に行われていなかった。2016年調査の時点では、学習者Aの持っている漢字・語彙の量が少なく、辞書を引くこと自体に時間がかかり、その内容まで吟味する余裕がない様子が見えた。

しかし、日本語力の向上と外部リソースの活用によって辞書で単語を検索する難しさが解決された結果、それに代わって現れてきたのは、辞書に書かれている複数の意味とその例文を文の意味の理解に生かすために試行錯誤する学習者Aの姿である。2018年調査では辞書を詳しく参照する事例が増え、辞書に記載された語の意味が読んでいる対象の文に合うかどうかの吟味が慎重に行われている。表3、表4からもわかるように、学習者Aは2018年調査で、辞書の語義の部分を読むだけでなく、その例文についても、使用されている助詞を手がかりに注意深く読んでいる。たとえば表3では、「～に接し」について助詞「に」の前の部分に何が来るのかを把握するために、(10)の辞書中の例文を慎重に参照している様子が見える。

このような例文の読み方ができるためには、実は例文中の語をある程度知っておかなければならない。2016年調査の時点で辞書の例文を詳しく参照していないのは、例文を読むための語彙力が十分ではなかったことも原因の1つだと言えるだろう。このように考えるならば、辞書の使用に関わる難しさとして挙げた(5)の「辞書から適切な語義や、該当する例文を選択するのが難しい」は、例文を

読んで理解できるだけの日本語力がある学習者しか辞書が十分に活用できないことによるものであると言い換えることができる。

鈴木（2013）は、初級から超級までの日本語学習者を対象に辞書使用に関するアンケート調査を行い、その自由記述欄の回答から各レベルの日本語の辞書使用の特徴と問題点を抽出している。その結果日本語能力試験「N3」合格が目安とされる中級中盤になってから、辞書の例文が重視されることを報告している。また、「N2」合格が目安となる中上級レベルでは「例文を重視しており、辞書を用例集として活用する工夫も行われている」（鈴木、2013、P.139）としている。その一方で、中級前期レベルでは、「基本的な操作方法や検索方法についての疑問が未解決のまま使用し続けている場合がある」「電子辞書の機能のすべてが活用されていない場合がある」「辞書の記載内容が十分でない場合に次にどうするか、自律的な解決方法は確立されていない」（p.137）としている。このような中級前期の特徴は2016年調査時の学習者Aに当てはまり、2018年調査で辞書の例文を慎重に参照している様子は、鈴木（2013）が指摘する中級中盤および中上級の特徴と合致するものである。

このように、学習者の日本語のレベルとそれに応じた辞書の使用のあり方があるとして、このような見方には読むために使用できる外部リソースの技術の進歩という視点が抜け落ちてるように思う。時間を戻すことはできないが、もし2016年に「Yomiwa?」が使用できていたら、学習者Aの読解のプロセスはどのようであっただろうか。桑原（2018）で読解困難点として挙げた（1）「語の区切り方がわからない。特にひらがなの連続をどう区切るのかが難しい」と（3）「字形の似ている漢字を識別するのが難しい」については、「Yomiwa?」の使用によってかなりの部分で解決されたのではないかと推測する。そのことによって生まれた余裕は、学習者Aに何を可能にさせたのだろうか。辞書の例文を参照することがどの程度できたのだろうか。上述したように、例文を参照するためには、例文を読めるだけの日本語力が必要である。このように考えるならば、鈴木（2013）で例文の参照が重要視されるようになるのは中級中盤からであるという指摘も頷ける。しかし、もし2016年に「Yomiwa?」が使用できたとしたら、例文の参照がどの程度必要であったのかという疑問が生じる。このことは、今後論文の読み方を学び始めようとする中級前期の学習者に対して、最新の外部リソースを使いながら読むことについてどのような指導が必要とされるのかという問いである。この点について検証した研究はまだ見当たらないが、学習者Aのような挑戦的で学習意欲の高い学習者のためにはぜひ必要な研究である。

今後学習者Aが向かうべき上級レベルについて鈴木（2013）では、「母語と日本語の双方向から辞書を引いて関連する表現にも目配りする」「コロケーションに注意を払う」「用法に注意する」などが挙げられている。これらは、すでに学習者Aにもあてはまるものである。たとえば、助詞「に」に注目して例文を探すことは「コロケーションに注意を払う」ことでもある。このように見ると、2018年調査時の学習者Aは、自身の専門である教育系の論文を読むことにおいては、上級学習者と同様に辞書を使いこなしていると言えそうである。

なお、鈴木（2013）では、日本語による一言語辞書の使用が上級レベルから見られ始め、超級レベルでは普通となるとしている。しかし、学習者Aにとっては、日本語による一言語辞書、すなわち国語辞典の使用はまだ難しいようで、使おうとする様子はまったくない。その一方で、学習者Aは調査

中に何度も、日本語と英語は単純に翻訳することはできず、日本語には日本語独特のニュアンスがあることについて言及しており、そのことが論文の理解を難しくしていると話している。日英辞書の限界を感じていることがうかがえる発言である。それらはどのように克服することができるのか、そのために国語辞典がどのような役割を果たすことができるのか、もしも国語辞典を使用したときに読みの過程にどのような変化が見られるのかについては、今後も引き続き追跡していきたい課題である。

本研究は、科研費（15H01884）の助成を受けたものである。

参考文献

- 桑原陽子（2018）「非漢字系中級学習者の論文読解における語の意味理解に関する読み誤りの分析—教育実践論文の読解プロセスの観察データから—」『国際教育交流研究』 2, 25-35.
- 鈴木智子（2013）「日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント—留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄のSCATによる質的分析を通して—」『東京外国語大学論集』 86, 131-158.
- 舘岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』東海大学出版会

Change in dictionary use of an intermediate Japanese learner from non-Kanji culture as related to the processes for reading academic journal articles

—A case study of one learner coping with the reading of pedagogy journal articles.

Yoko Kuwabara

This study will describe the change in dictionary use for one Japanese learner during a period of over two years. Analyzed were data pertaining to the reading processes of one learner from January 2016 to April 2018. At the beginning of the case study, the data indicated little reference to the example sentences in the learner's dictionary. However, by April 2018, analysis of the data indicated that the learner had shifted their focus to comprehension through detailed reference of the example sentences. The change was due to the learner's improvement in language proficiency and in the use of a different external resource. As of the time of this study, there has been few investigations on the reading processes and development of a Japanese learner for such a duration. Moreover, including data and analysis pertaining to dictionary use should prove useful in terms of how to train Japanese learners in the use of them.

Keyword: academic papers, reading processes, dictionary, intermediate Japanese Learners from non-Kanji cultures, pedagogical journal articles